



「踊ることが大好きです」と遠山さん

輝いています ひと

高校生バレエダンサー

とお やま は な
遠山 花菜 さん

感情を伝える踊りを目指して

市

内に開設されて約20年間で、多くのプロダンサーを輩出してきた関口・吉川バレエアカデミー。その指導者の関口武さん・吉川文子さんをして、「努力の天才」と称される若きバレリーナが、ここにいます。その名は遠山花菜さん(15歳)。現在は、イギリスのバレエ校に8日まで短期留学中で、蔵からプロを目指して飛躍しようとしています。道端などで気づけば踊っていた遠山さんがバレエを始めたのは6歳のとき。メイクと華やかな衣装で輝く先輩が憧れでした。2年後には現スクールに入り、さまざまな技を習得する喜びから夢中になるなかで、より上達するためコ

ンクールへの出場を決意。週6回の練習後に自主練習を課し、「ピルエット(片脚旋回)」の回転数を伸ばすなど、ときには涙を流しながらも着実に技術を磨いていきました。激しい練習は足首、膝などの故障と隣り合わせのため、予防のストレッチは毎日1時間以上。しなやかな脚や体の美しいラインなど、繊細な動きの意識付けも行い、芸術性・表現力も高めていきました。その努力が結実したのが、昨年8月の「ヴィクトワールバレエコンペティション」です。遠山さんは、「眠れる森の美女」のオーロラ姫として、2分半でその気品を優雅に表現し、中学生の部1位と最優秀指導者賞を受賞。留学権も手に入れました。コロナ禍でその権利は失うものの、オーディションを通過し、今回の短期留学の権利を獲得。自ら海外への道を切り開きました。「せりふのないバレエですが、どんな役でも自分の踊りで感情を伝え、お客さんに感動してもらいたいです」と力強く語る遠山さん。帰国後の次なる留学先はカナダ。異国で刻む美しいステップは、やがて大輪の花を咲かせるでしょう。

今月の河鍋曉斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

—No.75—



曉斎筆「翡翠、木蓮、目高」
紙本色摺 団扇絵

長いくちばしの翡翠が一匹の目を捉え、紫木蓮の枝に止まっています。開いた花弁の奥には目高が列をなして泳いでいる姿が、あつさりした筆致で描かれています。当時、人気の絵師だった曉斎は、団扇に貼るためのこのような多色刷木版画を数多く描きました。なお、本図は元々、明治14年(1881)に出版された絵本『曉斎楽画』の中の一図です。この『曉斎楽画』からは、他にも団扇絵に転用しようとしたものがあることが分かっています。

河鍋曉斎記念美術館 開催中

企画展「曉斎・曉翠 植物画」展 同時開催 特別展「第36回かえる展」

開館=午前10時~午後4時

休館=火・木曜日(祝日除く)、
毎月26日~末日、年末年始

ところ=南町4-36-4

入館料=一般600円 高校生・大学生500円

小・中学生300円 65歳以上500円

※65歳以上は年齢の分かる物、学生は学生証
をご提示ください

詳細=同館(☎441・9780)



展覧会の詳しい
内容は美術館の
ホームページを
御覧ください



Kyosai
Kawanabe

現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の曉翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 曉斎

天保2年(1831)
~明治22年(1889)